

序 章

ギッシング小伝

ピエール・クステイヤス



ウェイクフィールドの中心街ウェストゲイト（1900年頃）。
一番左端が薬剤師だったギッシングの父の店で、この頃は
J・L・チャップリンが所有していた。

社会の諸悪を根気よく観察して公然と非難した後期ヴィクトリア朝の小説家として、現代の英文学者や読者に知られているジョージ・ギッシングは、二つの世界を持つ男である。一つは彼自身が貧困やその他の悪条件によって住むことを余儀なくされた世界、もう一つは想像力ゆたかな彼が子供時代からずっと避難所を求めた古典の世界である。二十五年に及ぶ文筆生活の終わりに、ギッシングは往時を回顧する必要性を感じ、芸術家としての体験についての瞑想録『ヘンリー・ライクロフトの私記』（一九〇三年）を読者に提示した。そこでは彼の半自叙伝的な人物ライクロフトが、「私は学者になる素質を持っていた。余暇と心の平静とがあつたならば、学殖を積んできたであろうし、学寮の構内にいたならば、常に自分の想像力を^{いじえ}古の世界で働かせ、とても幸福で無邪気な生活を送っていたであろう」（『春』第十七章）という啓発的な、同時に人を誤解させるような可能性を秘めた告白をしている。しかしながら、このようなことは夢にすぎなかった。

一八五七年十一月二十二日（日曜日）、旧ヨークシャー州のウエスト・ライディングと呼ばれていた地方のウエイクフィールドという町で生まれたギッシングは、のちに作品や手紙の中心でしばしば言及することになる醜い産業の世界について、幼児期にはもう熟知していた。この地方の当時の工場主たちが優先したのは、清潔な空気や水ではなくて自分自身の利益だったからである。ギッシングの父トマス・ウォラー・ギッシングは、

本質的な点について言えば独学の薬剤師だったが、そうした環境問題も意識していたようで、政治活動では自由党員であつたので、問題改善に全力を尽くしたものの、成果は乏しかった。このトマス・



ジョージ・ロバート・ギッシング
(1865年頃)

ギッシングの父も祖父もサフォーク州の田舎を一度も離れたことがない、つましい靴職人だった。だが、トマス自身には知的小および芸術的な願望があり、そうした願いに合致する様々な自己発展の道を探していた。彼が情熱を注いだのは植物学と詩歌で、英国のシダ類とウエイクフィールドの植物に関する本を二冊、そして小さな詩集を三冊ほど出版していた。好きな詩人はワーズワスとテニスンであった。長男のジョージは天分に恵まれた早熟な子供で、そのことに気づいていた父は総合的な（特に文学、歴史、芸術、言語を含めた）教養についての熱心な探究を息子に奨励した。²ギッシング少年は賞を獲得するような秀才であったが、彼が散文と詩の分野で残した若き日の作品は、³知識人および芸術家としての高い潜在能力をはっきりと示すものであった。異常なほど内気であった点を除くと、彼の学校生

活と家庭生活については、すべてが一八七〇年まで順調であった。しかし、働きすぎの父は衰えていた自分の健康に最後の数年間ほとんど注意を払わず、ある呼吸器系の病気が原因で、その年に死んでしまった⁴。

ギッシングは二人の弟たちと一緒にチェシャー州の寄宿学校へやられた⁵。その(名目上はクエーカー教徒の)校長は、彼の宗派の教義と慣習に自分本位で従っていた。ギッシングが軍国主義を嫌った原因は、一八七〇年代の初めに週一回ほど浅はかにも受けさせられていた数時間の軍事訓練までさかのぼることができる⁶。一八七二年から七六年にかけて、彼はオックスフォード大学地方試験の結果がマンチェスター地区で一位となり、奨学金を得てオーエンズ・カレッジ(現在のマンチェスター大学の前身)で勉強を続けることができるようになった⁷。彼はラテン語、ギリシャ語、英語で特に目立っていて、ちょうど彼の傑作『流謫の地に生まれて』(一八九二年)のゴドウィン・ピークのように、才気煥発な刻苦勉勵の学生であった。ギッシングの旅行記『イオニア海のほとり』(一九〇一年)の背景には、エドワード・ギボンの存在が一度ならず感じられるが、彼は少し知的な刺激が必要だと思った時に、ジョン・フォースターの『デイクেনズの生涯』(一八七二―七四年)と同じように、この歴史家の著作を何度もむさぼり読んでいた。

ギッシングはマンチェスター時代に大学入学資格試験に合格して文学士の学位にパスした。その四年間の終わり頃には学者

としての彼の将来は以前にもまして明るく輝き、大学で身を立てる見込みは確実に手の届くところにあった。しかし、貧しい下宿住まいの孤獨な学生として、彼は不幸にも色欲の誘惑に屈してしまった。彼の教師だけでなく学友までもが予想していたような、そんな彼の出世街道は完全に閉ざされてしまったのである。彼は数ヶ月ほど年下のメアリアン・ヘレン・ハリソン(愛称ネル)という街の女と恋に落ち、彼女を更正させようとした⁹。だが、彼女に与えるための金が払底すると、彼は大学の更衣室で学友のポケットから金を盗むようになった。一八七六年五月三十一日、彼は現場を押さえられて逮捕された。公式発表によれば、彼自身のポケットで見つかった(裏に印がつけられた)金の総額は五シリング二ペンスだった。それで、一ヶ月の懲役刑を宣告され、当然ながら退学に処せられた¹⁰。ネルは残酷な社会の犠牲者——そのように思った彼は軽率な行動に出してしまい、決して解決できない社会問題に対して自己破滅的なアプローチをし、その結果を人生



メアリアン・ヘレン・ハリソン
(愛称ネル、1880年頃)

の終わりまで甘受することになる。とはいえ、彼の若気の至りについては百も承知で、その仕事上の進展を見守っていた人たちの中には、この不名誉な事件を彼は時の経過とともに忘れたと言う者もいる。それ以来、彼が自分に苦行を課すという根強い傾向とともに示した良心的な正直さは、その情緒生活とプロ作家としての経歴とにおいて、ここぞという時の彼の行為を特徴づけることになった。

この事件にひどく当惑した大学当局は、哀れな奨学生に対してもっと人間的な対処ができなかったことに良心の呵責を感じ、資金を集めてくれた。それに加え、ギッシング家の数人の友だちの善意のおかげで、母は一八七六年の秋に息子をアメリカへ逃がしてやることができた。異国の地で彼は人生の新たなスタートを切るものと思われた。しかしながら、そうはならなかった。ある絵画展についての記事を書いてやっと成功したボストンでも、しばらく試みに教職に就いた隣町のウォルサムでも、⁽¹¹⁾彼が根を下ろすことはなかった。オーエンズ・カレッジの教授たちを通して接触したアメリカの教養人たちの援助も、結局は何の役にも立たなかったのである。放浪性が次第に彼の生活を支配するようになった。突然、彼はウォルサムを離れてシカゴに向かい、⁽¹²⁾もうけの多い仕事を新たに——思い切つて——見つけようとした。もう十九歳になっていたギッシングは、シカゴで文筆生活に乗り出し、その地方の新聞に短篇小説を寄稿するようになった。⁽¹³⁾『シカゴ・トリビューン』紙の編集長や似

たような地位にある数名の人たちと彼との関係については、この二十年ほどで学術調査が進み、著しい成果を挙げている。⁽¹⁴⁾

しかし、一八七七年の秋、ギッシングは書く材料がなくなつて敗北を認めざるを得なくなり、相当な困難を経てイギリスへ帰国したが、母からは冷やかな歓迎しか受けなかった。ただちに彼はロンドンに上京して住まいを定め、むさ苦しい彼の最初の下宿にネルが同居するようになった。次から次に移り住んだロンドンの下宿については、長年にわたつて彼のベストセラ―となる『ヘンリー・ライクロフトの私記』で写実的に描かれている。約十年間——すなわち彼がなんとか自分のペンで多少の生活費を稼ぐことができるようになるまで——彼は様々な片手間の仕事をしてきた。支払いの悪い家庭教師の仕事が特に多かったが、それでも彼は徐々に二、三の上流家庭に出入りできるようにになった。ただし、彼らの偉そうな態度に彼は時々うんざりさせられたようである。

アメリカから帰国してギッシングがすぐに悟つたのは、ネルが矯正不可能な女であることだった。酒に溺れるようになり、荒くれた下層階級の女たちとの付き合いをやめない彼女の無責任な行動は、彼にとつて常に心の重荷となった。それにもかかわらず、マンチェスター時代に拘禁されたことを無視するのは不本意だったこともあり、彼は心に深く染み込んだマゾヒズムに駆られ、一八七九年十月二十七日(月曜日)——その頃にはすでに、彼女が行ないを改めることはない⁽¹⁵⁾と確信していたのだ

が——彼女と結婚した¹⁷。彼は三年後に彼女と別居することになるが、彼女が飲酒と梅毒に打ちひしがれ、一八八八年二月にラッベスの貧民街で死ぬ最後の最後まで、彼は毎月の手当を彼女に送り続けていた。

ギッシングが最初に出版した小説『暁の労働者たち』（一八八〇年）は計画的な自叙伝ではないが、彼が一八七〇年代後半に住んでいた世界を十分に照射するものである。題材についての問題は痛ましいかぎりだと言わざるを得ない。この小説の欠点は題材の多さゆえの欠点であるが、その責任は作者自身にあるというよりも、貸本屋^{ミズライ}によって促進された三巻本形式による小説の馬鹿げた出版システムの方にある¹⁸。この新進作家は便宜的に自分の能力を抑える方法を学ぶ必要があった。その点を洞察力のある何人かの批評家は指摘しながらも、このギッシングの小説には「何か偉大なものを感じさせる力強さがある¹⁹」という大胆な予言をした。ギッシングは、フレデリック・ハリソンやイヴァン・ツルゲーネフを通して、一八八一年から八二年にかけてサンクトペテルブルクの急進的な月刊誌『ヴェースニク・イブロープイ（ヨーロッパ通報）』に協力したが、それは彼が実証主義の信条を受け入れていた結果として見るべきである。もともと、その時にはすでに彼の社会主義に対する短期間の共鳴は過去のものとなっていたのだが。

『暁の労働者たち』はギッシングが労働者階級を描いた一八八〇年代の幕を切って落とした小説である。これに続いて彼の

初期の名声を主として支えた四つの小説、すなわち『無階級の人々』（一八八四年）、『民衆——イギリス社会主義の物語』（一八八六年）、『サーザ』（一八八七年）、そして八〇年代の中でも暗くて最も力強い『ネザー・ワールド』（一八八九年）が出版された。この最後の小説はロンドンの貧民たちの嘆かわしい生活状況を糾弾したもので、部分的には彼の妻の悲惨な死が執筆のきっかけとなっている。一八八六年には『民衆』でギッシングはそれなりの成功を収めた。その成功には、ロンドンで暴動が起こって一時的に社会の平和が危険にさらされた時期に、匿名で出版されたという事情が寄与している。大衆の生活を生き生きと描いた作家の名前は分からなかったものの、この作家の真剣さと芸術家としての才能について疑う知識人はいなかった。ギッシングの以後の作品も同じ観点から見られていたが、広く世間の好評を博する見込みはなかった。ギッシングはメレディースとハーデイが個人的に表明してくれた『無階級の人々』に関する好意的な評価を大切に心にしまっていたが、もし大衆の人氣を得ていたならば、さぞかし彼は心を乱されていたことであろう。

一八八六年と八八八年にそれぞれ出版した『イザベラ・クラレンドン』と『人生の夜明け』において、ギッシングは新たに地方の中産階級の生活に足を踏み入れた。これらは彼の扱うテーマの範囲の広がりを示す序曲であった。その範囲の広がり、彼の長い二回の海外旅行——まず一八八八年九月から八九年二

月まではフランスとイタリアでの滞在⁽²¹⁾、それから次の冬にはギリシャと南イタリアでの滞在⁽²²⁾——と同時に起こったことは注目に値する。初心者として古典の学習を始めた故郷ウエイクフィールドでの幼年時代については、のちに『無階級の人々』のウエイマークとカステイとの会話に反映されることになるが、そうした幼少時代から彼はいつか地中海の海岸地方を訪れ、古代史における歴史的建造物の中で最も重要な遺跡をじかに見てみたいと思っていた。今や、ネルが死んでしまったので、彼はあらゆる点で自由になったと思うことができ、貧困に伴う最悪の恐怖も小説の売り上げによって味わわずに済むようになった。外国文化に関する大きな夢をついに実現することができたのである。当時の彼の日記や手紙には様々な知的探究、とりわけギリシャとローマの文明への探究、そしてそれほどではないにせよ、ルネッサンス期に開花した芸術への探究についての詳しい説明があふれている。

ギッシングが二度の地中海旅行の間に書いた小説『因襲にとられない人々』(二八九〇年)は、E・M・フォースターの初期小説『天使も踏むを恐れるところ』(一九〇五年)と『眺めのよい部屋』(一九〇八年)における主要テーマを予告している。開放的な力を持つイタリアの生活様式は、あえて南方のナポリやロマンティックな名前を持つ他の景勝地まで足を踏み入れた英国の旅行者の中でも、教養が比較的人たちの道徳と精神にとって、利するところが大きであった。『因襲にとられない

人々』にはまた、十九世紀最後の十年間に書いた小説群を通して、ギッシングが英国のエリート層の読者に提示したテーマの探究についての前触れが見られる。それから数年のうちに、彼は傑作として定評のある『三文文士』(二八九一年)の中で、一八七〇年の初等教育法以後の教育の普及から生じた文学の商業化を論じ、次に『流謫の地に生まれて』(一八九二年)の中では、科学的な合理主義と伝統的な信念との対立を論じた。『流謫の地に生まれて』の主人公ゴドウィン・ピークは、ラスコールドに生まれて」の主人公ゴドウィン・ピークは、ラスコールド、バザローフ、ニールス・リーネ、ロベール・グレルー、そして私たちにもっと近いところでは巨匠カミュが創造したルムソーといったヨーロッパ小説の主要人物たちと比較されることが多い。

続いて一八九三年に、ギッシングは今ではいわゆる女性問題⁽²³⁾に関する大きな貢献と考えられている『余計者の女たち』を書いた。これは結婚適齢期の過剰な余計者の女たちを考察した小説で、世紀の変わり目には何十名もの男女の小説家たちの注目を引き、極めて多くの純粋な時代物⁽²⁴⁾の題材となった。いつものように、厳密に言えば真新しいとはほとんど言えない問題の本質を探究しながら、ギッシングは十分な独創性を見せている。この小説を再発行したヴィラーゴ版の序文で、マーガレット・ウォルターズは「よりよい未来の鍵を握っているのが、軽蔑的に社会活動の周縁へ押し出された敗残者や不適応者として見られる余計者の女たちであることは、この小説の中心にある生氣

に満ちた逆説である」と述べたが、それは正しい意見である。ギッシングは『因襲にとらわれない人々』において精神的な解放を分析した後で、やや意外なことに希望が不死鳥のように絶望の廢墟から復活するかも知れないことを示した。本職としての仕事と男女同権とは焦眉の女性問題に対するギッシングの解答であった。彼は性のアナキーの時代を予見していたが、自ら進んで自然に対して信頼を寄せた。これが性のアナキーという物議をかもすトピックについての彼の最終評価であったかどうかは疑わしい。一年後に彼のペンから生まれた『女王即位五十年祭の年』(二八九四年)は、混乱した国においては並木道も結局は単なる袋小路にすぎないことを示したものである。そして、もうけが少なくて慌ただしい都会生活によって二つの道が掘り崩されるといふ、そうした見解の一種の増補版の執筆を進取的な編集者クレメント・K・ショーターから依頼され、ギッシングは諷刺的な作品『イヴの身代金』(二八九五年)を書いた。これは、金と結婚することで情緒的なために決着を付けようとする若い女性が、一時的に幸せとなる運命——自由を手放して自分を人質にすることで見返りの金を要求する事例——を描いた小説である。

ギッシングは今や文筆活動の頂点に達した。一八九五年、彼はメレディスやハーデイとともに、当時の英国小説家のベストスリーの一人と見なされるようになった。そのきつかけとなったのは七月十三日、ジャーナリストのヘンリー・ノーマンがオ

マル・ハイヤーム・クラブの記念すべき集まりについて書いた記事であった。ギッシング自身は自分に敬意が払われているとは思っていなかったが、その道の目利きを自称する者たちよりは、彼の方がプロ作家の将来は外的な要素に大きな影響を受けることをよく知っていた。実際に、彼の作品は売れ行きがよかった——一八九三年以降、彼は短篇小説作家としての仕事にも乗り出し、年収もそれなりに増えていた——が、矢継ぎ早に出版された二つの中篇小説、すなわち一八九五年出版の『埋火』と『下宿人』がそれとなく示しているように、彼自身が先細りする危険が行く手に待ち構えていた。すでに彼は自分の健康が衰え始めていると思っていたのかも知れない。さらにずっと重要なことに、彼の心の安らぎはしばらく乱されていた。というのも、彼は一八九一年にイーディス・アンダーウッドという、またも無教育な若い女性と再婚していたのである。この二度目の結婚は最初の結婚同様に大きな不幸をもたらすものであった。とはいえ、状況は前回よりも悲惨だった。一八九一年の終わりに長男ウォルターが、続いて九六年の初めに次男アルフレッドが誕生したからである。それにもかかわらず、彼が部分的に家庭問題や教育問題と関連づけて書いた次の長篇小説『渦』(二八九七年)にとつて、彼の不安定な私生活はそれなりに益するところがあつた。これはどんな基準に照らしても素晴らしい作品で、昨今その真価がかなり注目を集めている。だが、たとえそうであるにせよ、この小説の完成と時を同じくして肺病の

初期の前兆が現われていた。病気が鎮静する時も何度かあったが、結局それは致命的な病気だと判明することになる。

しかし、『渦』を完成させている間、人心を奪っていた当時の政治状況（特に

日の出の勢いで現われていた帝国主義）に対する敵意を精神的支柱として、ギッシングは決して勇気を失わなかった。さらに、ちようどその頃、新たな分野が彼の目の前に開けてきた。ヴィクトリア朝シリーズという新たな企画にディケンズの作品を収めるにあたって、その批評書を執筆するようにと依頼を受けたのである。だが、熟知した問題で本を書くという仕事は延期しなければならぬところだった。というのは、彼の版權代理人であるウィリアム・モリス・コリスに、連載用の中篇小説を渡すに約束していたからである。しかしながら、このような困難な情勢にギッシングがひるむことはなかった。一つにはディケンズ批評の仕事は小説をこつこつ書くことからの嬉しい息抜きになるだろうし、一つには締切が互いに近いと彼の能力は阻害されるどころか刺激されたからである。しかし、不幸にも一八



イーデイス・アンダーウッド
(ギッシングの二番目の妻)

九七年二月初めに、二つの危機によって彼の計画は打ち壊された。ギッシングは妻の凶暴なるまいによってエプソムの家から追い出され、さらには健康の悪化によって気候の温和なデヴォン州で体力を取り戻す必要が生じたのである。二月中旬から五月の終わりまで、彼はディケンズを読み直しながら批評書のためにノートをとっていたが、それとともにカッシーオドールズとベネディクトゥスの著作にどっぷりと耽っていた。ゆつくりと彼の頭の中で形をなしつつあった六世紀を舞台とする小説の中で、彼はそれらの著作を利用する計画だったのである。

ギッシングが続けて生み出した作品は、彼の業績が多方面にわたっていることを示している。一八九七年九月に三度目のイタリア旅行を決心したことに、その徴候を見出すことができる。彼はついにイーデイスと別居することになった。彼女は息子のアルフレッドと一緒に住み、まさかの時には彼の頼りになる進歩的な二人の友人、イライザ・オームとクレアラ・コレットが彼女をなだめてくれたので、彼は安心してシエナの地で『チャールズ・ディケンズ論——批評的研究』を書くことができた。これはギッシングの偉大なる先輩のまともな評価へ道筋をつけた画期的な本である。それから、十一月にはイタリア最南端まで旅をして数々の印象を記録に残したが、それらは『イオニア海の手とり』(一九〇一年)という評価の高い気品ある文体の旅行記として結実した。モンテ・カッシーノでの短い滞在のうちに、彼は数ヶ月ほどローマに腰を落ち着け、長年あたたためてき

た六世紀のローマ人とゴート族(29)からなるロマンス、『ヴェラニルダ』(一九〇四年)のために資料を収集した。彼は国際色ゆたかな雰囲気の中で生活を送っていたが、それについてはユーモラスな見解を示している。そこへH・G・ウエルズ夫妻が加わった(30)。それは、古くからのドイツの友人であるエドゥアルト・ベルツ(31)の故郷であるポツダムを経由して、イングラントへ帰る前のことであったが、結局そのポツダム訪問はドイツで跋扈していた軍国主義に対する恐怖のために途中で切り上げられてしまった。

一八九八年六月、ギッシングの人生行路にまったく新しい局面が開かれた。ドーキング(32)に家を借りていた彼は、ガブリエル・フルリ(33)という二十九歳の教養ある中産階級のフランス女性(34)の訪問を受け、『三文文士』の翻訳の許可を求められた。その後の二人の恋愛は一八九九年五月に普通法上(35)の結婚に発展し、その時から彼はフランスに住むようになった。最初はパリで、時々はフランス中部のニエヴル県サントノレ・バンヤクアール、それから一九〇一年の末からは健康を害したためにジロンド県アルカシヨンのポルドー南部、そして最後はサン・ジャン・ド・リュエズ近くのシブールとサン・ジャン・ピエ・ド・ポール近くのイスプールというバス克地方の村で生活した。それより少し前のことだが、二人の家庭にガブリエルの母親が同居したので、それが主に食事上の理由から一時的に夫婦の不和の原因となった。その不和は一九〇一年の夏に頂点に達して

たが、その頃に彼はイギリスの医師たちの忠告に従って、サフォーク州ネイランドに新しく開設されたイースト・アングリア療養所に、六週間ほど入院しなければならなくなった(36)。そのあと彼の生活は以前より円滑に進んで行った。二度と再びイングラントに戻る機会はなかったが、彼の母国に対する郷愁の念が、特にエドワード・クロッド(37)や子供時代の友人で医師になったヘンリー・ヒックに書き送った手紙の中に、ますます現われるようになった。

他のジャンルに向かいたい誘惑にもかかわらず、小説は収益が一番よいという理由で、常にギッシングの主たる文学媒体と(38)なっていた。イギリス海峡を渡ってガブリエル・フルリと一緒になるのを待っている間に彼が書いた『命の冠』(一八九九年)の一部は、彼

女に対する愛が、きつかけと(39)なっているが、この物語は反帝国主義的な平和への祈りというテーマの点で『渦』とも強いつながりが



ガブリエル・フルリと愛犬ビジュ
(1904年頃)

ある。⁽⁸⁾ギツシングは『我らが大風呂敷の友』（一九〇一年）で再び政治的な慣習^{キレス}に向かったが、今回は地方生活の角度から、メレディス的な喜劇観⁽⁹⁾で活発に演出した。彼が近代生活を標準の長さで描いた最後の小説『ウィル・ウォーバートン』は一九〇五年に死後出版された物語だが、彼の最晩年を特徴づける諦念がたっぷり染み込んでいる。⁽¹⁰⁾これら二つの作品の間に、ギツシングは例のヴィクトリア朝シリーズのために書いたディケンズ批評の成功を再現させるべく、さらにこの先輩作家についても含まれているが、大部分はジョン・フォースターのディケンズ伝の縮約改訂版、そして不幸な運命をたどったロチエスター版と直筆原稿版への序文集とからなっている。⁽¹¹⁾しかし、彼の生前に出版された中で最も注目を引いた作品は、最初に『閑居幽棲の作家』として『フォートナイトリー・レビュー』に連載された『ヘンリー・ライクロフトの私記』で、彼にとつては以前にないほど多くの読者を得た。この風変わりな随筆集——一九〇〇年から〇一年にかけて情愛を込めて創作された追憶と思索が半々の随筆集——は、半世紀にわたってギツシングの純文学の作品をすべて顔色なからしめてしまった。明らかに、これは体がだんだん衰えて年老いてきた男の作品であるものの、健康回復に努める作風と物議をかもし生死の問題についての新鮮で、面白い、率直な見解とは、エドワード朝の人々を魅了する事になった。



サン・ジャン・ド・リューズにあるギツシングの墓（1904年頃）

ギツシングは歴史小説『ヴェラニルダ』を完成させる時間を与えられなかった。最後の五章は書かれないうままで終わっている。一九〇三年十二月初旬の散歩中に彼は風邪をひき、それがすぐさま気管支肺炎に悪化してしまった。クリスマスに彼が重体に陥ったので、ガブリエル・フルリは彼の友人であるH・G・ウエルズとモーリー・ロバーツを呼ぶために電報を打った。⁽¹²⁾ウエルズがイスプールに駆けつけると、ギツシングはまだ生きていた。しかし、この友人がバリ時代に必要な食事を与えられなかったことをウエルズは思い出し、彼にたくさん飲み食いさせたので、そのことが——ガブリエルの話によれば——イスプールのメゾン・エルギユで彼の死を早めてしまった。⁽¹³⁾とはいえ、

医者の意見によれば、十二月二十八日のギッシングの死の原因は心筋炎であった。この病人がうわごとを言っている際に起こったとされる改宗については論争があったものの、偽の情報を流した英国教会派の低俗な牧師セオドア・クーパー⁽⁵⁾に対して、友人のロバーツは新聞で怒りの反駁を加えた。ロバーツのイスブル到着はギッシングの死後であったが、独自の調査によって彼はギッシングが最期まで首尾一貫して不可知論者だったという事実を再び定着させることができた。サン・ジャン・ド・リューズまでギッシングの棺に付き添ったロバーツは、彼の親類たちへの敬意から準備されていた英国教会派の葬式に、当地に居留するイギリス人たちと一緒に参列し、その地方の共同墓地の頂上にある墓に友人が埋葬されるのを見守った。十二月三十日のことである。

学生時代の経験はトラウマとなつてギッシングの心に深い痕跡を残したが、彼の性格は温和で、内気で、愛他的であった。このマンチェスターでの不正事件以後、幸福に通じる道はすべて自分には閉ざされたという確信から、ギッシングは屈辱的な結婚を二度もしてしまった。たとえ教育のある女性が芸術家としての自分の目的に共感してくれたとしても、当然のことながら彼女たちは決して結婚に同意してくれないだろうと思つていたのである。文筆生活の最後の十年においても、金銭的な不安が常にギッシングの心を悩ました。批評家たちから受ける好評と取入との間に落差があつたため、彼は皮肉な言葉を何度も

発していた。だが、生まれながらに陰気な男だつたわけではなく、気心の知れた仲間たちと一緒に時は、友人や知人と機知に富んだ話をした。ギッシングは厳しい芸術家だったので、自分の作品に対する世間の評価に満足することは滅多になつた。それにもかかわらず、彼は正しい知識のある批評家たちから高い評価を得ていた。古今東西の文学に関して膨大な知識を備えたギッシングは、あらゆる形の暴力に反対する平和主義者であつたが、同時に近代の生活様式と反りが合わないヒューマニストでもあつた。彼は金銭的報酬よりも自分の芸術における主義を優先した作家として記憶されている。完成した原稿を破棄してしまつた回数が多いのはそのためである。⁽⁶⁾

戦中・戦後における日本の知識人たちは、人道になつた特性がはつきりと見えるギッシングの短篇小説や純文学としての小説に反応し、その真価を最初に認識した人たちであつた。⁽⁷⁾ そうしたギッシングの作品の途切れずに持続する社会性と今日性については疑う余地がない。昨今、ギッシングに対して好意的な批評家たちには、彼のことを時代の良心となるべく立ち上がった知識人として見なす傾向が見られる。ギッシングは女性の心を鋭く分析したが、彼自身が一八九五年に言明したように、「我々の時代に特有の——十分に教育を受け、育ちもまあまあの、お金がない、そうした部類の若者たち」を描く時に、おそらく最も力強さを示す作家であつた。文化と教養への間断のない傾倒ゆえに、ギッシングは何世代にもわたつて眼識のあ

る読者たちに慕われてきた。ある特定の真実がどんなに口に合
わないものであると、彼は勇敢にもそれを言葉で表わした。
確かな独創性を持つ芸術に加えて、人間に関する諸事について
の（悲観的とはいえ）明晰な見解によって、ギッシングは英国
小説史に占めるべき場をしかと保っている。

【訳註】

(1) 旧ヨークシャー州は三つの地方に分かれていたが、ウェスト・
ライディングはその一つ。バラ戦争の古戦場として有名な大聖堂
の町、ウエイクフィールドはリーズの南約十六キロにある。ギッ
シングが生まれたのは、町の中心街ウェストゲイト（本章の口絵
参照）の五十五番地——現在は六十番地。彼には、二十歳で死ん
だ一八五九年生まれのウイリアム、弁護士としても小説家として
も成功しなかった六〇年生まれのアルジェノン、そして六三年生
まれのマーガレットと六七年生まれのエレンという弟妹たちがい
た。信心深いだけで教養がなかった母マーガレットは息子を愛撫
することもなかったため、この母をギッシングは嫌って避けてい
た。

(2) 父は多くの蔵書——ギッシングが説破した最初の本は当時の流
行作家ディケンズの『骨董屋』（一八四〇〜四一年）——を持って
いて、教養を志向する点において息子に大きな影響を及ぼした。

(3) 例えば、オーエンズ・カレッジ時代にA・W・ウオード教授へ
提出した「十八世紀の英国小説」という題のエッセイ。「君の文体
は直截簡明シラクトリックによって非常に引き立っている」というコメントをも
らっている。

(4) 三十三年後、ギッシングは奇しくも父と同じ日（十二月二十八
日）に、同じ原因（肺充血）で亡くなっている。

(5) マンチェスターの南東にあるオールダリー・エッジという町に
ある教育水準の高いリンドウ・グロウヴ・スクール。学校時代の
ギッシングは勉学を続けるための奨学金獲得に向けて睡眠を五時
間半に定め、食事の時も散歩の時も本を読んでいた。

(6) 『ヘンリー・ライクロフトの私記』（春）第十九章）では、学
校時代に校庭で行なわれた軍事教練の思い出を通して、徴兵制度
が非難されている。

(7) 最初の二年間、ギッシングはオールダリー・エッジに寄宿した
まま通学し、三年目にマンチェスターで一人暮らしを始めた。

(8) 十八世紀のイギリスの歴史家。『ローマ帝国衰亡史』（一七七六
〜七八年）は、トラヤヌス帝治下から東ローマ帝国滅亡までの千
三百余年を論述した古典的名著。

(9) 一八七六年二月に淋病を患ったにもかかわらず、ギッシングは
ネルをお針子として更正させるためにミシンを買い与えたり、父
の形見であった時計を売ったりした。しかしながら、彼女は飲酒
癖があつて金のために売春をやめなかった。

(10) 一八七四年から翌年にかけて必死に準備して合格していたロン
ドン大学入学の許可も取り消された。

(11) ギッシングの批評文はボストンの新聞『コモンウェルス』の一
八七六年十月二十八日版に掲載された。

(12) ボストンの西郊外にある市。ギッシングが臨時雇いの教師をし
たウォルサム高校は一九三三年に取り壊された。

(13) 三月一日に学校をやめた理由は、ネルから帰国を願う手紙をも

らっていたギッシングが、一歳年下の女学生マーサ・バーンズと深い仲になることに対して良心の呵責を感じたからだと言われている。

(14) ギッシングが二日で書き上げて十八ドルを得た最初の短篇小説「父の罪」は、『シカゴ・トリビューン』の一八七七年三月十日版に載った。

(15) 例えば、一八八〇年代の『ギッシング・ニューズレター』に掲載されたロバート・L・セーリグによるギッシングのアメリカ時代の埋もれた短篇小説についての一連の論文。

(16) 上京したギッシングは最初グレイズ・イン・ロード近くに家具付きの部屋を借りた。一八七七年の終わりにはトテナム・コート・ロードはずれの下宿に移ったが、これはロンドンにきたネルトと一緒に住むためであった。このあと、ギッシングは何度も引越したが、それは行く先々で繰り返されるネルの売春と喧嘩のせいであった。

(17) 彼はリージェント・パークの東にあるハムステッド・ロードのセント・ジェイムズ教会でネルと国教会の慣習に従って結婚した。

(18) 一八四二年に貸本業を始めて全国展開したミューデーは、一巻ものに比べて三倍の料金を読者から稼ぐことのできる三巻本形式を好んだので、出版社は新刊を大量注文するミューデーの意向を無視できなかつた。

(19) 一八八〇年九月十五日版『マンチェスター・イグザミナー・アシンド・タイムズ』の匿名書評からの引用。

(20) ハリソンはイギリスの法律家・哲学者・実証哲学協会会長（一八八〇〜一九〇五）。実証主義に熱中してハリソンの論文を読んで

いたギッシングは、『暁の労働者たち』を彼に献本していた。ハリソンもギッシングを多くの文人に紹介し、自分の息子たちの家庭教師として雇ってくれた。また、ギッシングが何回も読んだツルゲーネフの『父と子』（一八六二年）では、合理主義思想を信奉して、いかなる種類の信仰も受け入れない主人公の態度が、『流涕の地に生まれて』におけるピークの道徳問題に甚大な影響を与えている。

(21) 一八八〇年十一月二十七日、この雑誌に年四回の記事を書くように、ギッシングはツルゲーネフから頼まれた。

(22) 一八八八年二月二十九日にネルが死んだという電報を受け、翌三月一日に彼女の遺体が置かれた汚い下宿を見たとき、社会的な不公平に対する激しい憤りが再びギッシングの心によみがえった。

(23) ギッシングは、ハーデイが知性と教養の点でメレディスに劣っており、朝食時にナイフの平で蜂を圧殺するような彼の粗雑さの原因は生まれの卑しさにあると思っていた。

(24) スミス・エルダー社から受け取った『ネザー・ワールド』の版權料百五十ポンドを旅費にあて、パリで一ヶ月を過ごしたのち、汽車でマルセイユまで行き、そこから船に乗って十月三十日にナポリに着いた。その後は、十一月三十日にローマ、十二月二十九日にフィレンツェ、翌年二月八日にヴェニスへ行った。そして二十六日にヴェニスを発ち、スイスとベルギー経由で三月一日にロンドンに帰り着いた。

(25) 一八八九年十一月十一日にロンドンを発ち、最初にアテネで一ヶ月ほど過ごしてからナポリを再訪し、そこに翌年二月二十日まで滞在した。

(26) この小説では、近代社会の中産階級における競争心が生み出す自己欺瞞的な世間体第一主義が、ギッシングの皮肉と諷刺の対象となつている。

(27) ラスコールニコフはドストエフスキの『罪と罰』(一八六六年)の主人公。自己の理性を過信して殺人を犯し、罪の意識に怯えながらも心美しい娼婦との出会いによって自首を決意する。その心理的葛藤の変遷についての描写が世界の文学に与えた影響は計り知れない。バザーロフは農奴解放前後のロシアの田園を舞台としたツルゲーネフの『父と子』の中で進歩的な知識階級を代表する主人公。この作品では父と子との相克を通して、ニヒリズムを底流に新旧の時代の対立が描かれる。ニールス・リーネはJ・P・ヤコブセンの『ニールス・リーネ』(一八八〇年)の主人公。無神論の立場によって詩作と恋愛で人間性を高揚させ、生きる根拠と目的を失いつつも信念を曲げない人物。ロベール・グレルーはポール・ブルジェが科学万能主義(特にそれを土台にした自然主義)への批判として書いた『弟子』(一八八九年)の主人公。感受性も動物的起源以外にはないので道徳上の善悪などは派生的な基準にすぎないという高名な実証主義哲学者の師の教えを守り、恋愛感情についての人体実験を行ない、殺人罪で捕らわれる。ムルソーはカミュの『異邦人』(一九四二年)の主人公。養老院で母親の埋葬に立ち会つても涙せず、葬儀の翌日には情婦を作り、「太陽のせいだ」殺人を犯すムルソーを通して、生の無意味と不条理の思想が展開される。

(28) 一九八〇年のヴィラゴ版は、一九六八年のプロンド版と同じノンブルだが、本文の誤りが訂正されて、ウォルターズの序文が

付けられた。

(29) 『イラストレイティッド・ロンドン・ニュース』の編集長だったショーターは、短篇小説の契約によってギッシングに商業ベイスでの道を切り開いてくれた。

(30) ノーマンは『デイリー・クロニクル』の文学欄の編集主任。オマル・ハイヤームはベルシャの数学者・物理学者・天文学者・医学者・哲学者。この文学愛好者のクラブは、一八九五年十二月に会員となったギッシングにとつて、生涯で最も重要な社交の場であった。

(31) 一八九〇年九月二十四日の日記によれば、ギッシングはオックスフォード・ストリートのミュージック・ホールでイーデイスに会つたようである。翌一八九一年二月二十五日(水曜日)、彼は彼女とセント・パンクラスの戸籍登録事務所で結婚した。

(32) 彼女は結婚して数年後に精神異常の兆候を示し始め、召使たちと喧嘩をし、短気を起こして家庭を混乱させ、ギッシングに対しても事あるたびに悪態をついていた。最後は精神病院に収容されたまま一九一七年に死亡した。

(33) 一八九六年十二月二十七日、ギッシングはオーエンズ・カレッジ時代の旧友J・H・ローズから手紙で依頼された。

(34) 一八九三年九月二十二日に初めてコリスと会つたとき、短篇小説の場合は千語につき三ギニーと聞き、ギッシングはその場で五篇を手渡した。

(35) ギッシングはイーデイスを残し、デヴォン州の海岸町バドリ・ソルタトンで一人暮らしを始めた。

(36) カッシオドルスはローマの政治家・著述家・修道士。東ゴ

ト王に仕え、公文書や書簡を集めた。ベネディクトゥスはイタリアの修道士で、五三〇年頃にイタリア中部のモンテ・カッシーノにベネディクト修道会を創始した。

(37) オームは裕福な不動産譲渡取扱人で、ギッシングの晩年の親友となり、彼の妻イーディスと次男アルフレッドの面倒を見てくれた。家庭が騒動で常に緊迫していたので、長男ウォルターの方はウエイクフィールドの実家に預けられていた。コレットはギッシングが妻についての悩みを手紙で最も多く伝えた相手。ロンドン大学で経済学の学位を取った最初の女性である彼女は、「新しい女」としてギッシングに気に入られた。

(38) ギッシングは九月二十五日にイタリア中部の都市シエナに着き、十一月十六日には旅行のためにナポリを離れ、丘陵と山地が多いイタリア半島南端のカラブリア州まで行った。

(39) スカンジナビアから移動してきた東ゲルマン民族で、一世紀頃にバルト海沿岸の南部に住み、三〜五世紀にローマ帝国を侵略した。

(40) ギッシングはウエルズと一八九六年十一月二十日のオマル・ハイヤームのクラブで初めて会った。ウエルズは幅広い自然科学の知識をもとに独特の想像力を生かした科学小説で名声を得たが、戦後は警世家・啓蒙家・文明批評家として活躍した。

(41) ベルツは、ライプツィヒとチューリンゲンの大学で哲学と政治学を学び、活動的な社会主義者となった。ギッシングは最後の十六年間に月一回の割合でベルツに手紙を書き送った。

(42) 一八九八年五月六日にギッシングが家を借りたサリー州のドーキングは、ロンドンの南南西約三十五キロにある古くからの市場

町。ギッシングはイーディスの訪問と手紙を避けるために数人の友だちにしか住所を知らせなかった。

(43) 四十一歳のギッシングがガブリエルに初めて会ったとき、二十九歳の彼女は流暢な英語に加えてドイツ語とイタリア語にも通じ、ピアノに熟達した美しい声の持ち主であった。

(44) ギッシングとガブリエルが彼女の母と一緒に住んだ家は、ブローニユの森に近い大きな現代風のアパート（シャム通り十三番地、パシー）。

(45) 一九〇二年四月二十四日にアルカシオンからスペイン国境近くの海辺の町サン・ジャン・ド・リユーズへ引越し、翌一九〇三年七月一日には避暑のために隣町のサン・ジャン・ピエ・ド・ポールへ移っている。

(46) ギッシングの父に自分の店を売った薬剤師ヒックの息子ヘンリーに勧められ、ギッシングは六月二十四日に療養所に入り、しばらくは体重も増えて健康を取り戻した。

(47) クロッドは銀行家であったが、一八八四年にジョンソン協会、九二年にオマル・ハイヤーム・クラブの設立に尽力して会長となり、サフォーク州オールドバラの自宅で当時のほとんどの著名人を客としてもてなした。

(48) 『命の冠』で、ギッシングはボア戦争を企業連合に基づくイギリス帝国主義の発現として非難し、彼と同様にトルストイの影響を受けて兵役を拒否した霊の戦士ドラゴネールに見られるロシアの精神性を帝国主義の解毒剤としている。

(49) 実証主義の影響を受けたメレディスの『喜劇論』（一八七七年）によれば、喜劇的精神とは人間の心理に潜む矛盾と欺瞞の上にモ

リエール流の知的な笑いを浴びせ、その社会生活を反省させるものである。

(50) 事業の失敗で資産を失った主人公が雑貨屋の店員という不名誉を甘受し、素直に商業の時代に屈服するという諦念は、人間の行為はすべて外的な力に支配されているというギッシングの決定論の表出だと言える。

(51) ロチェスター版ディケンズ全集のために書かれた序文は、『チャールズ・ディケンズの作品研究』と『不滅のディケンズ』として共に一九二四年に上梓された。

(52) ウェルズは『イヴの身代金』や『下宿人』に対して好意的な書評を書き、ギッシングとは頻繁に手紙を交わし、彼が死ぬまでは陰に陽に力になってくれたが、彼の死後は故人をユーモアのない堅物で、人を軽蔑する楽しみに耽溺した、本当に恥ずかしいほど臆病な俗物として批判した。ロバーツはギッシングのオーエンズ・カレッジ時代からの学友で、のちに彼を小説化した伝記『ヘンリー・メイトランドの私生活』(一九二二年)を書いた。

(53) ウェルズは、『トーン・バンゲイ』(一九〇九年)の中で語り手の叔父が南フランスの隠れ家で臨終を迎える場面に加え、『自伝の試み』(一九三四年)の第八章において、ギッシングの死を看取った時のことを描いている。

(54) ロバーツは一九〇四年一月にアングロカトリック派の新聞『チャーチ・タイムス』へ送った短信の中で、一生涯ギッシングは神学上の教義に敵対していたと述べた。

(55) 逆に、失敗に終わった二度の結婚でも明らかなように、教育を受けていない労働者階級の女性との結婚は、彼にとつて性的欲求

を満たすための手段にすぎなかった。

(56) 例えば、一八八二年九月初めに書き終えた『グランディー夫人の敵たち』の原稿は、貸本業ミューディーの読者に受けそうにないという理由でスミス・エルダー社から返却され、五十ポンドで引き受ける代わりに校正段階で削除と書き換えを要求したベントリー社とも折り合いがつかず、結局は原稿も校正刷りも行方不明になってしまった。

(57) 一九七〇年代になると、英米で高い評価を受け始めた『三文文士』やフェミニズムとの関係で注目され出した『余計者の女たち』をはじめ、幾つかの長篇小説に目が向けられるようになった。そして、一九八八年に全五巻の『ギッシング選集』(小池滋責任編集、秀文インターナショナル)が出版されてから、ギッシング関係の論文が急激に増えた。

(58) 一八九五年二月十日にモーリー・ロバーツに宛てた手紙からの引用。

(松岡光治訳)